考古アラカルト 56

特別展示「伏見人形」によせて

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

本町二十丁目から出土した土型を使用した復元品（焼成後のものと彩色した完成品。製作：丹嘉）

京都市考古資料館では、平成24年度後期特別展示として「伏見人形」を開催します。

伏見人形は、伏見稲荷大社門前の深草周辺で生産された土人形です。その起源については明らかになっていませんが、江戸時代前期には生産が開始され、江戸時代後期に最盛期を迎えて土産物・縁起物としての需要を高めました。また、伏見港から水運により大坂（大阪）、さらには日本各地へ伝えられ、全国の土人形・郷土玩具の源流となったことが知られています。

伏見人形は、合わせ型を使用して成形し、焼成後に着色して仕上げられます。天神・七福神などの神、力士・役者などの人物、狐・牛・馬などの動物、蔵・舟などの器物、その他さまざまな種類が作られました。京都市内の旧家には、布袋（ほてい）や寝牛（ねうし）などが伝世されており、伏見人形に関わる習俗が広く普及していたことがうかがえます。

伏見人形は、京都市内の江戸時代の遺跡からは、必ずといってよいほど出土する遺物です。なかでも、京都迎賓館・御所南小学校・伏見区総合庁舎の発掘調査では、多種多様な伏見人形が出土しました。また、伏見稲荷大社北側にあたる本町二十丁目での発掘調査では、伏見人形の製作に使用された多量の土型が出土しました。

今回の特別展示では、京都市内の遺跡から出土した伏見人形や製作に使用された原型・土型とともに、寛延年間（1748～1751年）創業の窯元である有限会社丹嘉（たんか）のご協力を得て、出土した土型から製作した復元品や、伏見人形に関わる江戸時代の絵画資料などを陳列することで、京都の伝統産業の一つである伏見人形の生産・普及のようすを紹介します。

伏見人形の製作工程（『広益国産考』）

1：材料となる陶土を掲く
2：原型から土型を作る
3：土型に陶土を入れ成形する
4：窯で焼成する
5：地塗りののち彩色する

本町二十丁目の調査（上：人形の土型　下：人形を焼成した窯）

伏見人形の製作工程

土づくり　採取した陶土を水に浸してから、足で踏んだり臼で搗いたりして練り上げます。かつては東山山麓から良質の陶土が産出していました。

原型の作成　人形の原型は、きめの細かい陶土を用いて細部まで丁寧に造形します。また、型合わせができるように工夫され、土型の合わせ目の線が刻まれています。

土型の作成　原型に陶土を押し当てて土型を作成し、焼成します。土型は合わせ目の線にそって前後や左右で一組になるように分割された形になります。土型は一つの原型から複数組が作られます。

成形　土型に陶土を押し当て、しばらく乾燥させてから、弾みをつけて軽く叩いて土型から取り外します。一組になる片方ずつの型から、それぞれ取り外したものを合わせて継ぎ目を調整します。最後に空気抜きの孔をあけます。

乾燥・焼成　十分に乾燥させたのち、窯で焼成します。薪を用いて均質に焼成するには、技術と経験が必要でした。

地塗り　焼き上がった人形の表面に膠で溶いた胡粉（貝殻をすりつぶした白い粉）を塗りつけます。

彩色　膠で溶いた顔料で着色し、表情や柄を描いて絵付けすると完成です。　（山本雅和）